幾春別川の歴史 魚道

History of Ikusyunbetsu River

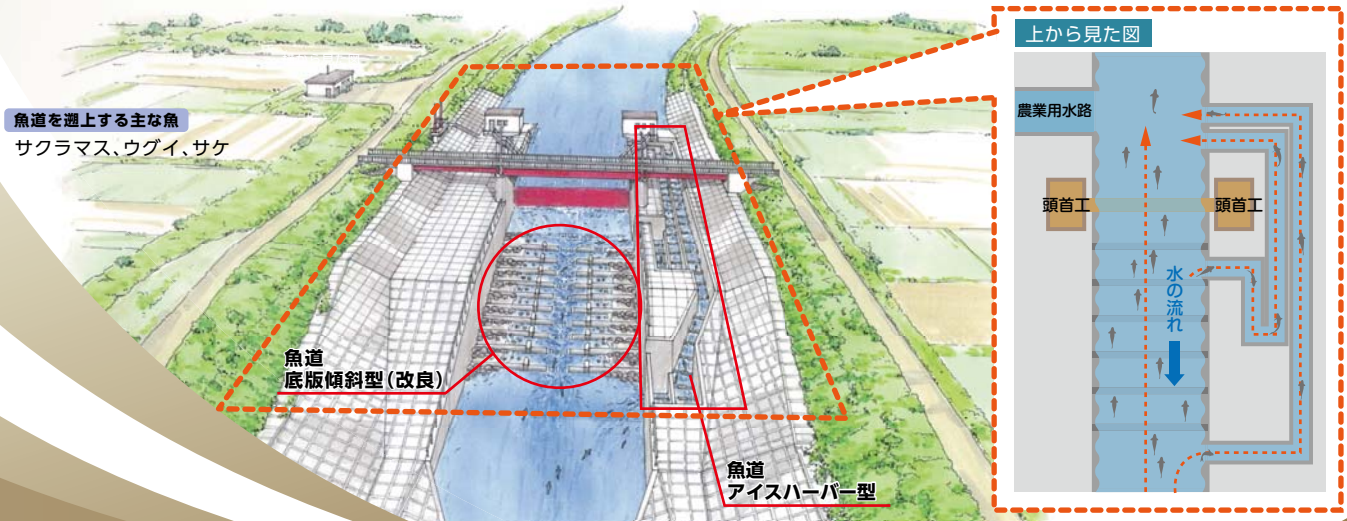
魚に優しい川づくり

石狩川は平成6年度に「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル河川」の指定を受けました。堰や床止めなどの河川を横断し魚類の遡上を防げるが、治水や灌漑などで重要な施設に対して、計画的に魚道を設置し、豊かな水辺環境づくりに努めてきました。幾春別川も事業の対象となり、魚道対策の最優先対象となっていた川向頭首工に魚道設置工事を実施することになりました。

頭首工の歴史と役割

川向頭首工

頭首工とは、農作物に必要な水を河川などから取り入れるため、流れをせき止めて水位を上昇させ、いつでも必要な水量を水田に流す施設です。用水路の頭の部分にあたるので、頭首工と呼ばれます。
川向頭首工の歴史は古く、明治30年谷口竹蔵氏ほかが、幾春別川に揚水機を設けたのが起源といえます。明治35年には川向土功組合が設立され、明治39年に頭首工が完成して水稲栽培は進展しましたが、用水の確保は長年の課題でした。
昭和32年、桂沢ダムの完成によって農業用水が安定的に供給されるようになり、幾春別川流域は道内における穀倉地帯の中枢へと発展しました。現在の川向頭首工は、昭和38年度と昭和56年度の改修工事を経た3代目として、流域に暮らす人々、そして魚たちをささえてきた100年以上の歴史を伝えてくれます。

魚道とは

魚道は、河川内にある魚類の移動の障害を取り除き、魚の住み易い状態を維持するためのものです。
魚道の基本設計は「石狩川・魚がのぼりやすい川づくり推進モデル事業実施計画（平成11年3月）」に基づくデータや学識経験者の意見に基づいています。川向頭首工の落差は、かんがい期で7.68m、非かんがい期で2.75mと変動が大きいため、それぞれに対応する二つの魚道を配置する構造となります。対象となる幾春別川に住む魚の遊泳力や体サイズなどの特性を踏まえ、川の条件、魚道工事の事例実績を基礎としています。